

平成 29 年度「東北大学学校ボランティア」活動報告

澁谷 拓巳¹・阿部 智恵莉²・星川 俊³・木村 一平²・
齊藤 和花²・細田 友恵²・後藤 武俊¹

¹東北大学大学院教育学研究科

²東北大学教育学部

³東北大学経済学部

本稿は 2003（平成 15）年度より活動を継続している「東北大学学校ボランティア」事業（以下、学校ボランティア）の 2017（平成 29）年度の取り組みを報告するものである。

1. 「学校ボランティア」概要

1.1 実施体制

学校ボランティアは、東北大学大学院教育学研究科・教育ネットワークセンターの事業の一環として行っている取り組みであり、同研究科の後藤武俊准教授を顧問とする事務局を設置して運営している。現在、事務局には東北大学の大学院生と学部生が 6 名所属しており、川内南キャンパス文化系総合研究棟 6 階に窓口を設置して活動している。詳しい活動状況については後述する。

事務局は仙台市教育委員会（以下仙台市教委）と提携している。仙台市教委が仙台市内の小中学校のボランティア要請を集約したものを、事務局が受けとり、本学学生に対してメールなどの媒体で配信する。本年度はその他に、富谷市や亘理町、岩沼市の教育委員会からもボランティア要請を受領し、学生に対して募集情報を配信した。

1.2 ボランティア活動内容

要請のあるボランティア活動は、小中学校での学習指導補助や、配慮を要する児童・生徒の指導補助と休み時間の話し相手、部活動や課外活動の補助など多岐にわたる。

1.3 活動学生の募集及び派遣方法

事務局では東北大学の全学部・研究科の学生を対象として以下の方法でボランティアの募集活動を実施している。

- ① メーリングリスト
- ② 教育ネットワークセンター前掲示板
- ③ 各研究科教務課への募集掲示依頼

2. 2017（平成 29）年度ボランティア活動状況

本節では今年度のメーリングリスト登録者とボランティア活動者の人数および所属構成をまとめ、学校ボランティアにおける活動学生の特徴について考察する。

2.1 ボランティア要請の状況

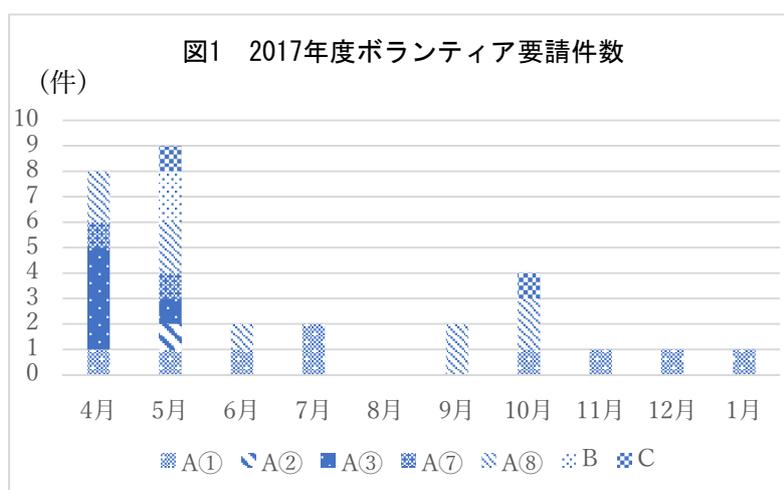
本学へのボランティア要請は以下のように分類されている。

表1 ボランティア要請分類

A①	各教科における指導補助
A②	総合的な学習の時間における指導補助
A③	特別活動（学校行事、クラブ活動）、道徳等の指導補助
A④	情報教育における指導補助
A⑤	学校図書館における指導補助
A⑥	放課後や休み時間等における児童生徒の話し相手、相談相手
A⑦	部活動指導補助
A⑧	そのほか、必要になる活動
B	にこにこボランティア
C	すくすくボランティア

上記分類の中で、Bのにこにこボランティアは「学校生活の中で配慮を要する児童に対する継続的、定期的な支援を行うボランティア」と定義されており、大学で教職課程又は心理学を履修した者、又は履修している者がボランティア学生の対象条件である。また、Cのすくすくボランティアは「発育測定や保健室において直接児童生徒に係る支援」であり、養護教諭免許取得に必要な科目を履修した者、又は履修している学生が対象のボランティア募集となっている。

これらの活動の中で最も要請の多かった活動は、A①（国語・算数・数学など各教科における指導補助）とA⑧（土曜学習・不登校支援・陸上記録会などの補助）であった。A⑧は定期考査前の学習会の補助などがあつた。学習支援の要請が多く、8月を除くすべての月で依頼があつた。



※A④～A⑥に関しては件数が0であったため表からは除外した。

2.2 今年度のメーリングリスト登録者および活動者の状況

メーリングリスト登録者の所属構成を表 2、そして今年度の活動者の所属構成を表 3 に示す。これらの表から読み取れることを以下に述べる。

まず今年度のメーリングリストの登録者の特徴だが、例年通り教育学部の学生が多かった。次いで理学部の学生が多く、そのほとんどは教員志望の学生であった。大学院に関しては学部同様に、教育学研究科の学生の登録が最も多かった。教育に興味関心があり、教員を志す学生の登録が多いことが分かる。

次に、今年度の活動者の特徴を見ていく。今年度の活動者数は昨年比で、学部生 1 名減少、院生で 2 名増加した。学部生の活動者は 3、4 年生が多い。これは、学年が上がるにつれ、履修科目が少なくなり、時間に余裕ができるので活動に参加しやすくなると考えられる。新入生よりも学外活動に充てる時間に余裕のある 3、4 年生や院生に広報をしたほうが、メーリング登録者そして活動者が増加すると思われる。

学部	人数(人)	大学院	人数(人)
教育学部	11	教育学研究科	4
理学部	6	経済学研究科	2
文学部	2	情報科学研究科	1
法学部	1	合計	7
医学部	1		
歯学部	1		
合計	22		(2017年2月現在)

学部	人数(人)	大学院	人数(人)
文学部	2	教育学研究科	7
教育学部	1	法学研究科	1
法学部	1	工学研究科	1
理学部	1	合計	9
合計	5		(2017年2月現在)

2.3 活動開始時期

本年度の活動者の活動開始時期を図2に示す。グラフは活動開始の件数とその月を年間の累積としてあらわしている。2017年度も例年通り、5月から7月にかけて活動を開始する学生が多かった。一方、大学が休校になる8月、9月、そして10月から始まる後期セメスターの活動者数が少ない。これは、この時期のボランティア依頼が少ないのが影響していると考えられる。



2.4 派遣学校の特性

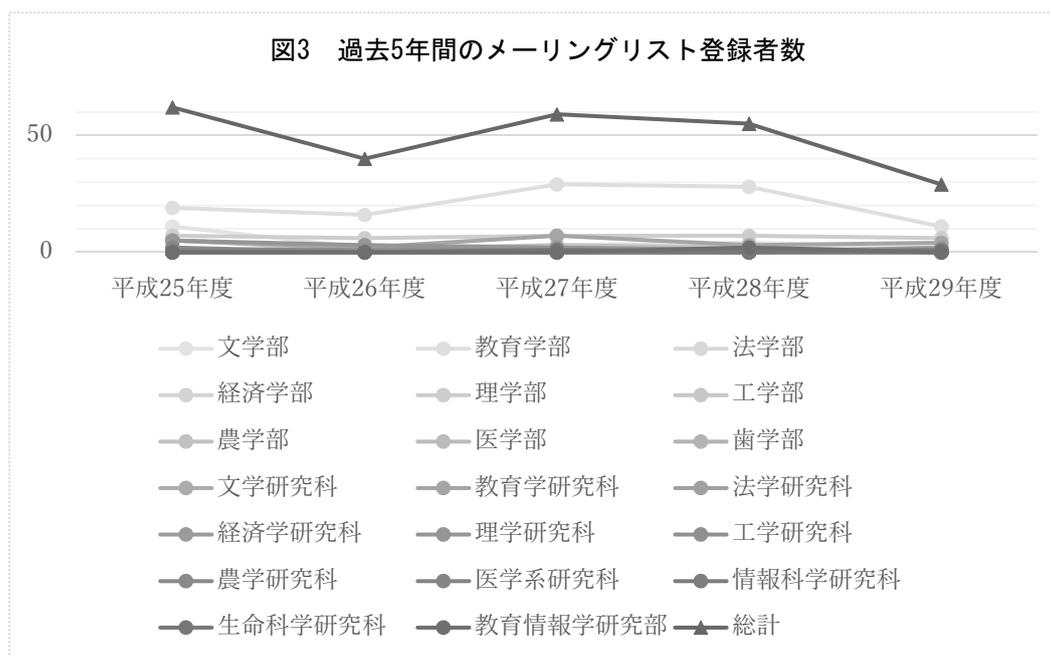
活動学生の派遣先学校を地図1に示す。この地図により本年度学校ボランティアから学生が派遣された学校は、川内キャンパス周辺や地下鉄・JR 沿線近くの学校が多く見受けられる。



地図1

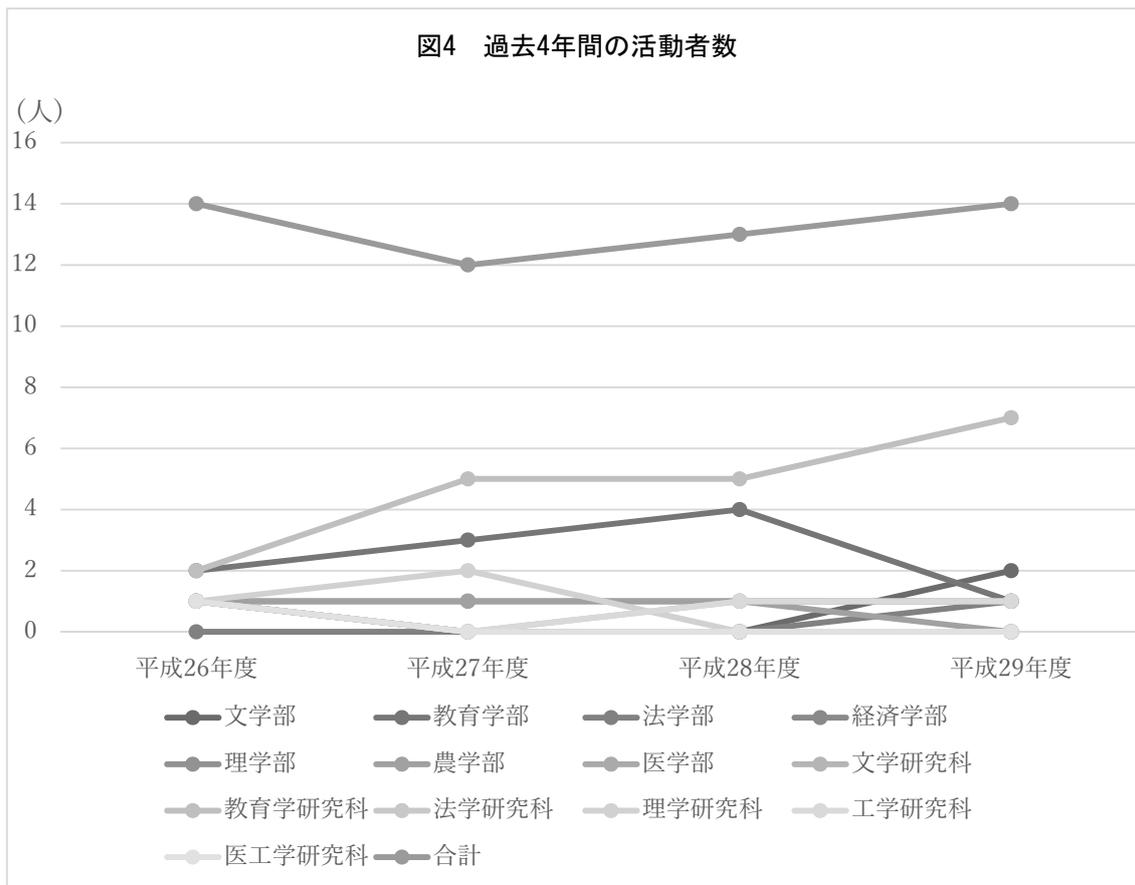
2.5 メーリングリスト登録者および活動者の推移

始めに、過去 5 年間のメーリングリストの登録者数の推移をみていく。図 3 はメーリングリスト登録者数の推移をグラフにしたものである。登録者数は、平成 27 年度から減少傾向にある。特に、平成 29 年度の減少幅が大きい。減少の要因としては、平成 29 年度のエデュケーション部の学生の登録者が大きく減少していることが考えられる。一方、エデュケーション部以外の学生の登録者数は、ほとんど変化していない。



次に、過去 4 年間の活動者数の推移をみていく。図 4 は活動者数の推移をグラフにしたものである。活動者数の合計は過去 4 年間であまり変化していないが、教育学研究科の院生の活動者数が増加傾向にある。メーリングリストの登録者数が減少しているが、活動者数はあまり変化していない要因として、学校ボランティア活動に継続して参加している学生が多いことが挙げられる。

今年度活動した学生には来年度も継続して活動してもらうこと、新規の活動者を増やすこと、この 2 点が今後の課題である。



3. 活動者の声

ボランティア活動を行った学生に対して、活動終了後に「活動報告書」という形式でアンケートを実施した。活動報告書では学生の活動内容、活動した感想、活動中に困った点、今後の事務局に対する要望、の4つを尋ねている。この報告書を本稿に掲載するにあたって個人名や学校名には匿名化の処理を行っている。また注目すべき箇所には下線を引いた。

Aさん(学部生)	
活動内容	月に2回ほど、〇〇中学校で土曜日の午前中に実施される、中学生への学習指導を行いました。指導内容としては、生徒が各自で勉強道具(ワークや問題集)を用意して、わからないところを見てあげる、といった感じです。
感想	はじめは慣れないところもありましたが、中学生も一生懸命取り組んでくれて楽しいです。
困った点	特になし
要望	特になし

B さん(大学院生)	
活動内容	中学校の特別支援学級で月 2 回程度、学習支援のボランティアを行いました。
感想	最初は、早く仲良くなりたいという思いからたくさん話しかけ、良くないことをしているときは、先生のように注意していました。しかし、そのような関わりではあまり打ち解けることができませんでした。 <u>同じ目線に立って「今はこんなことを考えているのかな?」「これがしたかったのかな?」と考えながら、生徒の世界に入っていくような関わりをしているうちに、少しずつ生徒たちの方からも話しかけてくれるようになりました。ゆっくりと生徒たちの好きなことを共有できるような関わりが大切だ</u> ということを学ぶことができました。
困った点	特にありません。
要望	特にありません。

G さん(大学院生)	
活動内容	週 1 回小学校中学年を対象に、先生の補助（資料配布、丸付け、休んでいた児童の補助、苦手科目の児童の補助等）を行いました。休み時間は校庭で児童と遊びました。
感想	<p>小学生といっても、1 年生から 6 年生までおり、学年により成長も学習する内容も全然違うと感じました。先生は本当にプロだと感じる場面が多く、たくさんのことを学ばせていただきました。先生の技を盗む部分もありましたが、先生が色々アドバイスを下さることで学ぶ部分も多々ありました。</p> <p>私自身がボランティアとして先生の負担を軽減するほど貢献できていなかったのではと感じています。一方で、ボランティアとして毎週学校に行く事で教育の難しさややりがいなどを肌で感じ、教育について考える機会を得られたことは大変貴重な経験だったと感じています。大学院で本だけ読んで知識を詰め込んでいても実際を知らなければ何の意味もないと思いました。</p> <p>毎週本当に勉強になることばかりで、先生にとっては迷惑か</p>

	<p>もしれませんが、ボランティアとして活動することはとても有意義だと思っております。</p>
<p>困った点</p>	<p>素人の自分があまりお役に立てていないようで、それが困った点ではありませんが、申し訳ない点と感じた点です。(小学校の教育分野は素人なうえに、中学高校の教諭免許は所有しているけれども、実践経験自体はないという状況であったため。) 今更ですが、先生は雑務もたくさん抱えており、私が来た時用の雑用を敢えて用意をしてもらっておくように頼んでおいてもよかったかもしれません。</p>
<p>要望</p>	<p>特にありません。強いて言うならば、<u>もう少し活動する学生の母数が増やせたら、教育の場に対する理解がより増えるのではないかな</u>、と思います。</p>

<p>Dさん(大学院生)</p>	
<p>活動内容</p>	<p>週1回、中学校の特別支援学級で授業補助を行いました。</p>
<p>感想</p>	<p>学校の仕組みや連携を直に学ぶことができました。</p>
<p>困った点</p>	<p>同じ学校に複数人がボランティアで行く際の連絡や情報共有ができず、少し困りました。</p>
<p>要望</p>	<p>特にありません。</p>

<p>Eさん(大学院生)</p>	
<p>活動内容</p>	<p>週1の水曜日午前中(または午後)に、中学校の特別支援学級に伺いました。主に、中学1~3年生の生徒さんたちと、授業を一緒に受けたり、分からないところがあればヒントを出したり、〇付けを担当したりしました。</p> <p>休憩時間中は、話し相手として、最近あったことや好きなことについてお話したり、生徒さんが好きな本と一緒に読みながら、クイズを出したりしました。</p>
<p>感想</p>	<p>昨年度に続いて2年目の活動だったため、生徒さんたちも名前を覚えてくれるようになり、大分、話もしやすくなりました。特別支援学級ということで、感覚過敏な特徴のある子や、作業に集中するのが苦手な子、家庭環境が落ち着かない子等、個々</p>

	<p>の背景事情は複雑で、接する際にどのように話しかけるか、どのくらいの距離を持っていたらいいのかが常に私の課題でした。</p> <p>今年度の活動を通して、そうした状況に置かれる<u>生徒さんの困難さを理解するように努め、学校に来ることが少しでも楽しく、意義のあるように感じてもらえれば良いと思って活動していました。</u></p> <p>「当たり前」とされることが苦手な生徒さんが多いのですが、それでも、将来、自分の力で生活していくために、今できる目標を立てて、授業や学校生活を過ごしており、そのような生徒さんの頑張りを見ることができて良かったと思います。同時に、この子たちにとって、こうした日常を「頑張る」面だけでなく、「楽しむ」面も持つことが、前向きに生活する上で重要だと感じました。</p>
困った点	<p>いたずらをする子を見て、注意しようか悩んでしまったり、雑談の際に、生徒さんによって、こちらの態度が変わってしまったりすることがありました。思春期の子たちと付き合っていく上で、危害を加えられるのではと、自分自身が恐怖を感じることもあり、それは難しいと思いました。</p>
要望	<p>特にありません。</p>

F さん(大学院生)	
活動内容	<p>月 2~4 回中学生を対象に特別支援学級の子どもたちの授業中の支援を行いました。</p>
感想	<p>障害のある子どもたちと関わり、一人ひとりの得意なこと・苦手なことを知っていくなかで、個人に合わせた支援の重要性を実感しました。</p>
困った点	<p>学校の先生方、支援員の方がとても親切でしたので、大きく困ったことはありませんでした。ただ、子どもと関わるなかで、はじめは信頼関係を築くのが難しかったです。</p>
要望	<p>活動や決まりについて、はじめに丁寧に説明していただいたので、特に思いつきません。</p>

4. 事務局活動状況

事務局の基本業務は主に、広報・活動者募集活動と活動者向け活動(各種手続きを含む)に分類される。

広報・活動者募集活動においては、広く東北大生に向けて学校ボランティアについて、またメーリングリストの登録を呼びかける広報活動を行う一方で、メーリングリスト登録学生に対しては定期的にボランティア依頼情報をメールで配信した。前者に関して、例年行っている説明会を5月に一度開催するにとどめた代わりに、学務情報メールを通じて全学部に広報を行ったり、通年で掲示しているポスターに随時改定を加えたり、10月のセメスター始まりに活動者募集ビラを新たに作成・配布したり、12月、学部1、2年生や文系学生が多く利用する川内北キャンパスの文系食堂へ三角柱を設置したりするなどした。これは、例年、広報対象が1、2年生中心である一方で、活動実態として時間割にゆとりのある3、4年生や院生が中心であったため、教育学部内だけではなく他学部の、しかも3年生以上に向けてもアピールできる広報手段を採用したことによる。

活動者向け活動においては、ボランティアを希望する学生への支援業務を行っており、この活動が事務局の芯となる業務にあたる。学生からの活動希望を受けて、事務局が活動希望学生に対してボランティア開始までの手続きのほか、交通費、保険に関する説明を行う。本来は年度始めの市教委による研修会への参加が活動開始の条件となっているが、随時の活動希望者に対しては事務局員が仙台市教委による研修会を年一回受講し、研修会を代行している。また、学生のニーズに応じて、派遣先となる学校側にボランティア内容の詳細を確認するなど希望学生と募集学校間の調整役を担っている。実際に活動が開始した後も、必要があれば連絡を取り合い、学生のサポートを行う。

さらに、仙台市の学生サポートスタッフ事業以外の業務として、大和町、岩沼市、亘理町といった仙台市外の教育委員会からの学校ボランティア募集を行った。こちらのボランティアに関しては、交通費、保険への加入の説明は行わず、希望した学生と教育委員会の仲介を行う形とした。

5. 来年度に向けた課題

本節では学校ボランティア事業の運営を行う事務局として、今年一年間の活動を振り返り、今後のよりよい活動のために課題と来年度への抱負を述べる。

澁谷

私がこの事務局に加入して今年度で5年目になります。顧問の後藤先生から継続的に支援をいただきながら事務局の学生を代表して活動をしてきましたが、これまで事務局を維持していくことにあまり焦点を充ててきませんでした。部活やサークルのように、学生が中心となって運営していくというのは世代交代が頻繁にあり、いかにして業務に関するノ

ノウハウを残していくかが重要になります。5年間活動に携わってきた経験と知識をもって、来年度は事務局運営の維持ということも考えながら、事務局のボランティア学生に対する支援体制を今一度見直したいです。

阿部

今年度設置した3角柱の案は新しかったが、設置を許可いただいた数や期間に制限があったため、その効果が十分に発揮されなかった可能性が考えられる。来年度は他キャンパスの食堂への設置も視野に数を拡大していけるのが望ましいだろう。一方で、本年度は Facebook の更新が疎かになってしまったが、近年若者の Facebook 離れもあるので、今一度更新ペースや内容とともに、その存在意義について要検討であるといえる。

星川

今年1年間活動してみて、ボランティア活動の詳細な内容を学生に伝えるメール配信の在り方に課題があると感じた。

今年度のメール配信の対象者は、今年度新たにメーリスに登録してもらった学生だけだった。昨年度活動していた学生にもメール配信を続けることで、来年度の参加を促せる。また、今年度メーリングリストに登録したが活動するまでには至っていない学生も、学年が変わって時間に余裕が生まれ、参加できるようになるかもしれない。実際、活動者は学部3、4年生や院生のように学年が上の学生が多い。これは、学年が上がるほど、時間の都合がつきやすいからだろう。こういった学生にメール配信で継続して情報を伝えることで、より多くの学生にボランティア活動に参加してもらえるのではないだろうか。

後期から新たに3名が事務局に加入してくれた。引継ぎ時には、作業の内容を熱心に聞き、質問もしてくれていたのが安心して任せられそうだ。これから1年間、頑張ってください。

木村

11月にこの事務局を知ってからあっという間に学期末まで来た。これまでの事務局の活動、活動者の活動について、私はほとんどといっていいほど無知だった。ボランティアと聞くとどうも身構えてしまいがちだが、事務局にはそういう気負いを減らす役割もあるのではないかと思う。来年度も多くのボランティア活動を紹介していけたらと思う。

斉藤

ボランティア事務局員になってまだ三か月ほどしか経っておらず、事務局の活動を客観的に見る余裕がありませんでした。早く仕事を覚えて、ボランティア事務局員として、東北大生のボランティア活動をサポートできるよう頑張っていきたいです。

細田

活動を始めて約4カ月が過ぎようとしているが、まだまだ自分から発案したり仕事をこなしたりすることができていないのが現状である。来年度からは自己責任を強く持ち、活動を遂行していきたい。

後藤

まずは大学院生になってからも事務局の代表として支えてくれた澁谷君に感謝したい。学部1年生から事務局員を担ってきた彼の存在がなければ、今年のようにスムーズな事務局運営はできなかつたと感じている。また、昨年度の後半から関わってくれた星川君、阿部さんは、滞りなく仕事を進めてくれただけでなく、新たなアイデアも提案してくれた。今年度で活動終了となるが、彼らのアイデアを引き継ぎ、今後の活動に活かしていきたい。最後に、今年度後半に事務局員に加わってくれた木村君、細田さん、斉藤さんは、短い期間ではあったが、事務局の仕事を理解しようと積極的にミーティングに参加してくれた。来年度に向けてよい準備期間になったと思う。ここに挙げられた反省点・改善点を踏まえ、さらなる発展につなげていきたい。